

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：23501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381035

研究課題名(和文) 学力に関するナラティブ論的研究

研究課題名(英文) Study of competence from the view point of narrative inquiry

研究代表者

田中 昌弥 (Tanaka, Yoshiya)

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：60261377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本の教育実践の特長は、子ども理解に基づいて学力形成を行ってきた点にあるが、そのような実践を十全に分析できる一般性のある方法論を日本の教育学は開発できていない。他方、カナダから世界に広がっているナラティブ的探究は、子ども理解に基づく実践を分析する上で特に優れた方法論だが、子ども理解と学力形成の統合については開発途上にある。

本研究では、子ども理解と学力形成とを統合的に分析する方法論を探るべく、日本の教師とカナダのNIの研究者に対して往復的なインタビューを行った。それによって、21世紀に求められるコンピテンスとそれを育てる専門性のある次世代の教師のあり方について新たな知見が得られた。

研究成果の概要(英文)：The most important advantage of Japanese teachers' educational practices is that they have succeeded in improving students' competences by adopting the policy of attaching great importance to understanding children. However, to date, there are no general methods in Japanese pedagogy to effectively analyze this practice. One possible solution is the use of narrative inquiry, which is one of the most superior methods of educational practice analysis. However, it is in the process of developing a way to connect the understanding of children and the improvement of students' competencies.

In this study, I interviewed excellent Japanese teachers and Canadian narrative inquiry researchers to determine a methodology that integrates the understanding of children and the improvement of their competences. I discovered some vital points for educational practices in the 21st century, as well as insights into the teacher education being used to develop the next generation of the experts.

研究分野：教育学

キーワード：ナラティブ 学力 子ども理解 教師教育 ストーリー アクティブ・ラーニング 学習 再ストーリー化

## 1. 研究開始当初の背景

(1)【背景】現在の日本では、学習に意味を感じられない子どもが多くなり、学校現場も対応に苦慮している。高度経済成長期以降、学力が生(life)を支える知だとの実感はすでに希薄化していたが、学力の高さが必ずしも社会的ポジションの保障にならない時代に入ったことで、これまで以上に矛盾が顕在化したのである。

そうした中でも、日本には、学力と生との接続を達成している優れた教育実践がいくつも存在し、世界に誇りうる財産として蓄積されてきた。しかし、教育学は、個々の教育実践の意義を論じる研究はしてきたものの、それらの実践を貫く構造と意義の一般性を解明する方法論の確立には成功して来なかった。このことが、学力論争が幾度も繰り返されたり、文部科学省の言う「確かな学力」と、OECDの主張する21世紀型のリテラシーやコンピテンシーとの関係が不明確であったりするといった課題の主要な原因の一つである。さらに、21世紀型の能力を育てる教育方法として期待がかけられている社会構成主義的なアクティブ・ラーニングをどのように評価するのかといった今日の論争のテーマも、根底的にはこの課題の未解決から派生している。

その意味で、この課題を解くことには、日本の教育にとって意義があるばかりでなく、国際的な学力論の貢献にもつながることである。

(2)【動機】研究代表者は、これまでに受けてきた科研費による調査等を通して、カナダの研究者たちが開発し、国際的に広がりつつあるナラティブ的探究(Narrative inquiry)の可能性に着目してきた。ナラティブ的探究は、第一に、従来の教育学では理論的な検討が難しかった学習者の生(life)を「ストーリー」の概念によって分析する。第二に、家庭のストーリー、制度的ストーリー、そして教師が生育歴を通して身に付けてきたストーリーとの関係の中で学習者のストーリーがどのような影響を受け、また、自らのストーリーを再構成する「再ストーリー化(restorying)」に至るのかを重視している。これら第一と第二の点から、ナラティブ的探究は、学習者の生というミクロの領域と、社会というマクロの領域の間で機能する教育という営為の内在的な検討を可能にする優れた方法論だと言える。

しかし、その一方で、ナラティブ的探究は、能力・学力の形成の問題に踏み込むことには消極的なスタンスを取ってきた。それは、学習者に要求される能力や学力が、多くの場合、支配的ストーリーや制度的ストーリーの下

で要求されるものであるため、そうした教育的働きかけが、子ども・学習者のストーリーよりも、支配的ストーリーや制度的ストーリーを優先することにつながり、子ども・学習者のストーリーとの間に緊張関係をもたらすことを警戒するからである。とはいえ、ナラティブ的探究を学ぶ現場教師たちの間では、当然のことながら、自らの仕事としての授業を通しての学力・能力形成とナラティブ的探究を接続させたいという志向が見られるようになってきている。

他方、子ども理解をベースとした日本の優れた教育実践では、ナラティブ的探究と同様、学力が支配的、制度的ストーリーの要求に従属するものに矮小化されることに警戒的でありつつも、学力を、子ども・学習者が自らの生を充実させ、社会を更新する主人公になる手立てとして位置づけ、形成しようとしてきた。ナラティブ的探究が前提としてきたカナダを初めとする主に英語圏の国々の教育実践では、この点について日本の教育実践ほど自覚的でなく、そもそも教師が学力形成と子ども理解とを接続して考える伝統が希薄であった。このこともナラティブ的探究がこの領域で展開することに禁欲的であった理由であろう。

そのように考えると、ナラティブ的探究の方法論を発展させて日本の教育実践における子ども理解と学力・コンピテン形成との連関を分析することは、日本の教育実践の意義を理論的に明らかにすることと同時に、ナラティブ的探究が、支配的ストーリーに取り込まれない学力・コンピテン形成のあり方の解明に踏み出す重要な手掛かりになると考えられた。

## 2. 研究の目的

(1) 従来の教育学の方法では把握の難しかった生(life)を「ストーリー」の概念によって分析するナラティブ的探究を、学力形成も含んだ教育実践を分析する方法論として発展させ、新たな学力論を開発する。

それによって教育学で課題となってきた生と学力形成との接続の方法を明らかにし、これまでの学力論争から近年のアクティブ・ラーニングをめぐる議論までを一般性を持つ理論で整理できるようにする。それは、国際的な広がりを見せるナラティブ的探究への貢献にもなる。

(2) 上記の検討を通して明らかになったナラティブ論的学力・コンピテン形成の要件から、それを教育実践に具体化できる教師の力量とはどのようなものであり、その力量を育てる教師教育のあり方はどのよ

うなものかを検討する。

(3) (1)(2)の観点から教育学を見直したときに従来の教育学はどのように修正されるべきなのかを明らかにし、ナラティブ論の立場に立つ教育学を構想する。

### 3. 研究の方法

(1) ナラティブ的探究に関連する英語圏の論文・著作と、子ども理解を軸とする日本の教育実践の文献的検討を行い、両者の異同を確認した。

(2) ナラティブ的探究の中心地であるカナダ・アルバータ大学教員養成・現職教員教育センターに所属、あるいは出身の研究者・学校教員に対するインタビューと、子ども理解を基盤にしつつそれを学力形成につなぐ実践を行っていることで著名な日本の教師たちに対するインタビューとを往復的に行った。

具体的には、事前に、ナラティブ的探究の研究者・実践家には、日本の子ども理解を基盤とした教育実践についての説明を行い、逆に、日本の教師たちにはナラティブ的探究についての説明を行って、互いに一応の理解をもらった上で、双方が相手に対してもった疑問や違和感を重視しながら、基本的には親近性が高い両者の異同に踏み込んだインタビューを行った。それによって、両者の深い次元での共通性を確認するとともに、異質性については、それぞれの必然性を考察した上で、教育学を再構成する際の重要な論点として理論的な検討を加えることにした。

### 4. 研究成果

(1) ナラティブ的探究と教育学との関係について概念的整理を行ったことにより、多くのナラティブ・アプローチの中でも、特にナラティブ的探究が、教育現実や教育実践を外在的視点から分析する他の多くの方法論とは異なり、教育的営為の内在的解明とマクロの社会的視点との接続を可能にする、教育学の根幹となり得る方法論であることが明らかになった。

その成果の一部は、「教育人間学における Narrative Inquiry の可能性」として総合人間学会で発表した。また、「ナラティブ・アプローチによる教育学の再構成」として共著『教育の思想』（東京大学出版会、2017年予定）に論考が掲載されることが決まっている。

さらに、ナラティブ的探究の研究者に対するインタビューの過程で出されてきた注目すべき点は、ナラティブ的探究が提示している概念は、固定的、体系的な「カテゴリー」というよりは、むしろ個々に即して特徴を捉

える distinction と言うべきものだという指摘である。これは、ナラティブ的探究の中心人物たちの間では、言わば暗黙裡に共有されてきた点であり、むしろそれ故に、文献などでは意識的な論点とされてこなかった面がある。それが今回のインタビューのやり取りを通して言語的に明示化されたことは、日本の教育学や教育実践との対比を行い、教育学の学問論を進める上で重要な足場となる。ここから得られる示唆については、一部を「Narrative Inquiry との対話を通して見える日本の教育実践研究の意義と課題」(2016年8月)として日本教育学会で発表したが、司会及び参加者からは、従来の教育学の構成を大きく変える可能性を持つ議論ではないかとの意見を得た。これは、多様かつ変化する存在として人間を捉えようとする教育学が、対象を均質なものに還元することによって説明を成立させる自然科学的学問論を無批判に概念設定の前提としてきたことによる限界を乗り越えることにつながる論点であり、カナダの研究者たちと意見交換をしながら今後も考察を続けていく。

(2) 学力論についての概念的、学説史的検討を行い、日本の学力論において常に問題となってきた「生活」と「科学」との分裂について、両者をナラティブ的探究の中心概念である「ストーリー」によって接続できることを明らかにした。

その成果の一部は、「学力と臨床教育学 自己と世界を再構成する「ストーリーの学力」」として、田中孝彦他編の『戦後日本の教育と教育学』（かもがわ出版 2014年）に発表した。ここでは、二人の教師の教育実践の検討も示しながら、理論と実践の接続の観点から上記の説明を行い、それが実践分析にも有効であることを示した。今後は、この枠組から個々の学力論争を精緻に検討し、そこで提出されていた論点の意義をナラティブ・アプローチの観点から整理し、明らかにしていく予定である。

(3) 日本の子どもたちの学力・コンピテンス形成に貢献した優れた教師たちの教育実践が、それとは自覚せずに、ナラティブ的な子ども理解や教材研究を基盤にしていたことを明らかにし、それを次世代の日本の若い教師たちに継承するには、ナラティブ的探究による分析と言語化が有意義であることを明らかにした。

その成果の一部は、国内では、『教育』（2016年1月号）への執筆依頼を受けたのを機会に、「授業とナラティブ・アプローチ」と題し、「再ストーリー化(restorying)」の

概念による分析によって、従来理論化が進んでこなかった日本の教育実践の核心的意義が明らかになることを発表した。

また、日本の教師たちの教育実践の類型とそれについてのナラティブ・アプローチの観点からの検討、およびそれを次世代の教師たちにいかに継承するかという課題について考察した結果は、世界のナラティブ的探究関係の研究者と教師教育者たちを集めて10年に一度開かれる国際学会、An Academic Home Place: An International Community in Teacher Education Conference (カナダ・アルバータ大学)に、日本の研究者ではただ一人招聘されたことから、“Can Japanese next generation teachers inherit a narrative sense for Education? Significance of Narrative inquiry for teachers in Japan - ”と題して発表し、大きな関心を持たれた。

さらに、日本の教育実践の中に含まれてきたナラティブ的性質と学力・コンピテンス形成との関係について考察を続けているが、これについては、中間報告的段階のものが、ナラティブ・アプローチの研究者を集めて隔年で開かれる国際学会 Narrative Matters2016での発表が認められたので、“Narrative inquiry sheds light on the secret of Japanese teachers' culture - Restorying in elementary school classes”と題して発表したが、会場では熱心な質疑が行われるなど、日本の教育実践の意義について海外の研究者達の興味を喚起することができた。

(4) アクティブ・ラーニングを行うことが学力・コンピテンス形成において持つ意味、および、アクティブ・ラーニングに基づく個々の授業を評価するためには、単に活動的な場面を設定しているかどうかといった表面的な把握ではなく、その学習の背景にあるストーリーが学習者自身のストーリーと結びつき、それを発展させたり、再構成させたりするものとなっているのかというナラティブ論的な検討が必要であることを明らかにした。また、そこから、ナラティブ・アクティブ・ラーニング(NAL)の着想に至った。OECDの人材養成論やアクティブ・ラーニングについては、ナラティブ的探究にかかわる研究者の間でもやや評価が分かれていたが、個々の子ども・学習者のストーリーが軽視されることへの懸念が共有されていることはインタビューの過程で明らかになった。その観点から、アクティブ・ラーニングの根底をナラティブの観点から問い直す NAL の構想は賛意を得られた。

これらについての成果の一端は、日本臨床教育学会研究大会(2015年9月)における課題研究シンポジウムのパネリストとして「アク

ティブ・ラーニングと日本の教育実践 ナラティブ的探究の観点から」という題で発表した。さらに今後も論文化を進める予定である。

(5) 現在も検討中の論点だが、インタビューを通して、カナダのナラティブ的探究にかかわる研究者や教師たちは、子どもたちのストーリーを尊重し、支える役割に使命感を持って教育に臨んでいるが、そのことが支配的ストーリーとの狭間でしばしば悲壮な決意や無力感につながる場合もあることが察せられた。それに対して、子ども理解に基づく優れた教育実践を展開している日本の教師たちは、やはり支配的ストーリーとの緊張関係は持ちつつも、個々の子どものストーリーと触れ合い、それによって自分が子どもたちと共に成長していくことの幸福感の方が共通して主になっていた。そして、そうした日本の教師たちは、カナダのナラティブ的探究の関係者のインタビュー結果に接し、そのような使命感だけで教師を長年にわたって続けるのは難しいのではないかとの感想を持った。さらにこの結果をナラティブ的探究の関係者への再インタビューで問うたところ、自分たちも当然ながら子どもたちに支えられている面はあるとしたものの、日本の教師の場合と比較するとやはり子どもに「支えられる」よりも「支える」方が主となるのが実態のようであった。

カナダでは、若手教員の大量離職が問題となっており、ナラティブ的探究における教師教育研究の問題意識の一つもその点にある。日本でも、現状はカナダほどではないにせよ、若手教員の離職・休職が増加している。したがって、この点に関して日本のベテラン教師とカナダの教師たちのストーリーを比較しつつ考察を進めることは、教師の生きがいや離職問題を視野に入れた、日本とカナダ双方の教師教育研究に大いに資するものと考えられる。この点についても論文化に向けた考察を進行中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

田中 昌弥、授業とナラティブ・アプローチ、教育、査読無、2016年1月号、pp.47-54

〔学会発表〕(計 6 件)

山崎 隆夫、宮下 聡、田中 昌弥、

困難な教育現実の中で若い教師の育ちを支える大学の取り組みについての一考察、日本教師教育学会第26回研究大会、2016年9月17日、帝京大学(東京都・八王子市)

田中 昌弥、Narrative Inquiry との対話を通して見える日本の教育実践研究の意義と課題、日本教育学会第75回大会、2016年8月24日、北海道大学(北海道・札幌市)

田中 昌弥、Narrative inquiry sheds light on the secret of Japanese teachers' culture Restorying in elementary school classes、Narrative Matters2016、2016年6月22日、ピクトリア市(カナダ)

田中 昌弥、アクティブ・ラーニングと日本の教育実践 ナラティブ的探究の観点から、日本臨床教育学会研究大会、2015年9月26日、北海道教育大学札幌校(北海道・札幌市)

田中 昌弥、Can Japanese next generation teachers inherit a narrative sense for Education? Significance of Narrative inquiry for teachers in Japan -、An Academic Home Place: An International Community in Teacher Education Conference、2015年6月19日、エドモントン市(カナダ)

田中 昌弥、教育人間学における Narrative Inquiry の可能性、総合人間学会第9回大会、2014年6月7日、東京医科大学(東京都・新宿区)

〔図書〕(計 4 件)

田中 孝彦、田中 昌弥、杉浦 正幸、堀尾 輝久(共編著)、東京大学出版会、教育の思想、2017年予定(印刷中)、執筆担当:ナラティブ・アプローチによる教育学の再構成

日本教師教育学会編、山崎 準二、岩田 康之、田中 昌弥他多数、学文社、教師教育研究ハンドブック、2017年予定(印刷中)、執筆担当:第9章 ナラティブ・アプローチ

下地 秀樹、水崎 富美、太田 明、堀尾 輝久、田中 昌弥、中村 雅子他、三恵社、地球時代の教育原理、2016年、211頁、執筆担当:pp.92-112

田中 孝彦、佐貫 浩、久富 善之、佐藤 広美、田中 昌弥他、かもがわ出版、戦後日本の教育と教育学、2014年、320頁、執筆担当:pp.150-171

〔その他〕(計 1 件)

広木 克行、田中 昌弥、田中 孝彦、座談会 子ども・若者理解研究の課題を探る、臨床教育学研究第5巻、2017年3月、日本臨床教育学会、pp.6-40

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 昌弥 (TANAKA, Yoshiya)  
都留文科大学・文学部・教授  
研究者番号:60261377

(4)研究協力者

D. Jean Clandinin  
Janice Huber  
Sue McKenzie  
久保田 弘子(Kubota, Hiroko)  
(以上、University of Alberta)  
M. Shaun Murphy  
(University of Saskatchewan)  
Lynne Driedger-Enns  
Simmee Chung  
阿部 俊樹 (Abe, Toshiki)  
太田 一徹 (Ota, Ittetsu)  
佐藤 広也 (Sato, Hiroya)  
渡辺 絹江 (Watanabe, Kinue)